

COVID-19禍における感染対策を意識したソーシャル ワーク実習報告会の実践 - 学生と共に進めたハイフ レックス型による運営とその準備 -

著者	片山 寛信, 巻 康弘, 近藤 尚也
雑誌名	北海道医療大学看護福祉学部学会誌
巻	17
号	1
ページ	105-110
発行年	2021-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00064938/

[資料・その他]

COVID-19禍における感染対策を意識したソーシャルワーク実習報告会の実践
ー学生と共に進めたハイフレックス型による運営とその準備ー

片山 寛信, 巻 康弘, 近藤 尚也

北海道医療大学看護福祉学部臨床福祉学科

I. 序論

2020年, COVID-19の日本における流行拡大にともない, 政府からは, 感染対策として①密集・密接・密室を避ける(3密を避ける), ②安全な距離を保つ(ソーシャルディスタンスの確保), ③こまめに手を洗う(手指の手洗い, 消毒の徹底), ④室内換気と咳エチケット(マスクなどの着用), ⑤接触確認アプリのインストールなどが示されている。COVID-19の流行は対人援助専門職養成を含む高等教育にも大きな影響を与えた。文部科学省は, 2020年3月, 「令和2年度における大学等の授業の開始等について(通知)」(元文科高第1259号)を示し, 「大学等における感染拡大の防止」の方法として, 「多様なメディアを高度に利用して行う授業(以下, 遠隔授業)の活用などによる学修機会の確保に留意すること」(文部科学省, 2020a)とし, この後の通知では, 遠隔授業の導入例等も示している。

遠隔授業の1つであるハイブリッド型授業形態について田口(2020)は, 「学生が対面授業時に, オンラインにも存在する・しない, という軸と, 学習内容が同じ・異なるという軸でかけあわせて」, ハイフレックス型, 分散型, ブレンド型として整理している。(表1)

表1: ハイブリッド型授業の整理枠組み
田口(2020)を参考に筆者作成

	学生が対面授業時に オンラインにも存在する	学生が対面授業時に オンラインには存在しない
授業内容が同じ	ハイフレックス型	ブレンド型
授業内容が異なる	分散型	

北海道医療大学(以下, 本学)では, 感染対策の観点から, ハイフレックス型の授業形態を導入することにより, 例年通り, 多学年の学生・実習指導者・教員が参加するソーシャルワーク実習報告会(以下, 本学実習報告会)を実施した。実習報告会は, 「利用者との出会いや実習中に最も痛切に感じたことなどの個別の体験を他の学生や実習指導教員など, 全体に報告す

ることを通して, 客観視し, 次の学習や今後の学習課題を明確にしていく」(大友, 2014a)ための実習教育における事後学習の貴重な機会となるものである。

本学実習報告会は, 多学年合同で実施し, 2・3年生の実習体験を踏まえた報告と学年を跨いだ意見交換を通じた, 学び合いの機会であり, 翌年の自らの実習に向けた関心や学習課題を検討する機会でもある。また, その運営に関しても学生が主体となり実施する経験の場でもある。

本稿では, COVID-19禍において感染対策の視点から試行した「ソーシャルワーク実習報告会」の実践報告を通じ, 実習報告会の実施形態に関する資料を得ることを目的とする。

II. 本論

1. 感染対策を意識したソーシャルワーク実習報告会の検討

2020年度の本学実習報告会実施計画の具体化を行った9月, 10月時点では, 実習や対面授業を行っていたものの, 感染拡大の懸念もあり, 実施可否や実施方法の検討が必要であった。学内のソーシャルワーク実習教育について協議を行う北海道医療大学臨床福祉学科社会福祉実習委員会での協議により, 十分な感染対策を講じた実施計画を決定しつつも, 直前での中止の可能性も確認したうえで, 関係各所との連携の上で開催準備を進めた。また, 実施にあたっては, 教員が基本的な方向性を示したうえで, 学生の代表で組成する実習報告会学生運営委員会^{注)}(以下, 学生運営委員)が主体的に具体化し, 担当教員が感染対策を意識した取り組みを指導することとした。本学実習報告会までの事前準備について, 感染対策ガイドライン(内規)を作成し, 「学生への個別指導, グループ指導が必要な場合は, 教員の管理のもと感染対策を講じて実施」することに加え, 「学生のみでの自主的なグループ学習は, 学内制限に準じた対応として, 空き教室を利用して良いものとするが, 基本的には事前に申請し, 最大6講時終了時間(18時30分)まで」と制限付きでの実施を申し合わせた。事前準備, 当日における配慮事項は, 学内の感染対策委員(教員)に新型コロナウイルス対策についてのコンサルテーションを求め, 感染対策上, 徹底すべき点を確認した。実施計画時点での学内での感染対策の主要点としては, 学内規定を踏まえ,

<連絡先>

片山 寛信

北海道医療大学看護福祉学部臨床福祉学科

①手指衛生（石けんによる手洗い、手指消毒）の徹底と手で眼、鼻、口に触れないことを意識する。②マスク着用、咳エチケットの徹底。③身体的距離（最低1m）の確保などであった。さらに、報告会の特性を考慮し、④会場の設定として、できるだけ大人数にならないよう分散する。⑤座席は身体的距離の確保を行い設定する。⑥当日プレゼンテーションを行う教室は、演題から2メートル程度距離をあけて座席を指定する。⑦発表時の学生の移動は最小限にすることとした。

2. 感染対策を意識したソーシャルワーク実習報告会の概要

2020年の本学実習報告会は、約190名が参加し、オンラインと対面を併用する実施形態で行った。（表2）

なお、2019年は、参加者数約180名（1年生40名、2年生39名、3年生50名、実習指導者33名、4年生数名、教職員15名）で、1つの教室に参加者全員が集合して対面で行っていた。また、2019年（対面実施時）と比較した2020年（ハイフレックス型実施時）の感染対策への配慮事項の概要は、（表3、4）の通りである。このうち「感染対策に向けた配慮すべき事項」は、担当教員によって想定した点を提示したものである。

3. 設定した感染対策を意識した配慮の具体的内容

表3、4の項目に沿って、それぞれと配慮した内容について、具体的に整理していく。

1) 参加形態と配慮

参加形態として、例年は、すべての参加者が1つの教室に集合し、対面形態で実施しているが、今回の参加設定は、できるだけ密集を避け、感染リスクを下げるため、学年毎に教室を分散（1年生をA教室、2年生をB教室、3年生をC教室に配置）し、4年生と実習指導者は原則オンライン参加とした。同学年の学生が対面、他の教室の学生（学年）・実習指導者とはオンラインでつながる授業形態は、「学生が授業時に、オンラインと対面の両方に存在する授業の形態」である「ハイフレックス型」となる。さらに、学生の座席も固定することとした。

ハイフレックス型を進めるためのオンライン環境設定は、Zoom Video Communicationsが提供する、オ

ンラインミーティングアプリZoom Cloud Meetingsアプリ（以下Zoom）を使用した。C教室のパソコンをホストとした上で、各教室からアクセスし、双方向のコミュニケーション体制を構築した。（図）

実習指導者には、オンラインでの実習報告会の参加案内を行い、参加希望の確認が取れたものに対して、実習報告会のホストであるC教室のZoom URLを事前にメールで送付した。さらに、オンライン参加となる学生には、学内のオンライン講義にかかわるポータルサイトと、学生総合情報システムで本学実習報告会のURLを配信し、直接入室を可能とした。自宅療養の指示によりオンライン参加となる学生や、4年生の参加希望学生が混乱なくアクセスできるよう、ホストURLの明示について、オンライン講義URLの設定などをおこなう管理担当事務課及び教務課と協議検討の上調整した。

加えて、当日の予期せぬアクシデントに備え、実習担当事務室の電話番号及び、スマートフォンなどで利用できるメッセージアプリにおいて、緊急対応用のアカウントを立ち上げ、事前に案内した。また、Zoom URLを送信したメールアドレスも常時受信できる状況にしておくなど、様々なチャンネルを準備し、外部から接続する実習指導者に対応できる体制を構築した。

2) 会場の設定と配慮

教室は学年ごとに分散し、座席も固定し、当日使用する資料は座席にあらかじめ配置することとした。感染対策としての教室換気は、各学年の質疑応答の際全ての会場となる教室で実施した。2年生、3年生は、学生運営委員の会場係の学生が各教室にて窓を開放。配置がない1年生の教室は、教員が対応した。

会場に入室の際は、必ずマスクを着用し、アルコール消毒を行うこととした。また、使用するトイレを学年ごとに分散し、休憩時間における密集の発生予防に配慮した。

3) プレゼンテーションの対応と配慮

プレゼンテーションは、例年パワーポイントやロールプレイ、動画等の方法により、学年別で実習分野種別に編成したグループ毎に、まとめた内容を報告する

表2

開催日	2020年11月26日（木曜日）
時間	10時30分から11時55分（全体会：2年生のプレゼンテーション） 12時35分から15時25分（全体会：3年生のプレゼンテーション） 15時40分から17時（分野別意見交換会）
参加者数	総数192名（1年生43名、2年生39名、3年生45名、4年生5名、実習指導者43名、教職員17名） ※4年生、実習指導者、一部教員は、オンライン参加。
実施方法	ハイフレックス型授業形態を用い、学年別で実習分野種別毎に編成したグループ毎にまとめた内容をプレゼンテーションし、参加者との質疑応答を実施。

表3：参加形態・会場の比較と検討した配慮

	対面実施時	ハイフレックス型実施時	感染対策に向けた配慮すべき事項
参加形態	学生、教員、指導者全てが同じ教室にて実施。 【学生】 実習報告の発表がある2、3年生は、学年及び実習指導グループ毎にエリアを設定し、自由に着席する。発表がない1年生は、指定されたエリアで自由に着席する。 【教員】 指定されたエリアに自由に着席する。 【実習指導者】 教室前で受付を行い、指定されたエリアで自由に着席する。	【学生】 1～3年生は教室を分けて対面参加。4年生はオンライン参加。全員マスクを着用する。 【教員】 1年生、2年生、3年生の教室に教員を分散。オンラインの参加も可能とした。全員マスクを着用する。 【実習指導者】 原則オンライン参加。	長時間同じ部屋で過ごすため、学年を超えた伝播のリスクがある。教員を1つの教室に集めることで、教員全員に伝播するリスクがある。 指導者は臨床現場の職員でもあるため、利用者への影響が大きい。感染リスクを下げる必要がある。
	会場 感染対策はなし。	対面参加者全員にマスク着用。 アルコール消毒液を2セット用意。消毒の場において密になることを避けた。質疑応答の時間を換気の時間とし、こまめな換気を実施した。使用するトイレを学年毎に分け、休憩時間に密となることを避けた。	密となる可能性がある。消毒液周辺、トイレなどに関して、配慮が必要であった。全ての教室で換気が徹底される仕組みが必要である。

表4：プレゼンテーション実施方法・質疑応答実施方法の比較と検討した配慮

	対面実施時	ハイフレックス型実施時	感染対策に向けた配慮すべき事項
プレゼンテーション	当日登壇し、共通のパソコンとマイクを使用し、プレゼンテーションを実施する。	事前にプレゼンテーションを録画し、教室のパソコンで再生を行う。操作する学生は1名に固定する。	マイクの共用を行うため、接触感染のリスクが高まる。プレゼンテーション毎に、マイク及び登壇者周辺の消毒を実施する必要がある。
質疑応答	プレゼンテーションの後に、フロアの学生、指導者、教員が挙手の上質問。指名されたグループの学生が応答を行う。	教室の構造上、2年生3年生で、応答方法に差異があった。 【質問】 質問コーナーを設置し、マイクスタンドに立て、マイクカバーを装着したマイクで質問を行う。質問者が変わると、フェイスシールドとゴム手袋を装着した応答対応を行う担当がマイクカバーの交換、消毒を実施する。 【応答】 質問コーナーと同様の措置を取った上で、応答コーナーで応答する。（2年生）フェイスシールドとゴム手袋を装着した応答対応を行う担当が、マイクスタンドにマイクカバーを装着したマイクを指定された座席にいる応答者の口元に近づける。（3年生）発言者が変わる毎に同担当者がマイクカバーの交換、マイクの消毒を実施する。	マイクの共用を行うことで、接触感染のリスクが高まる。発言による飛沫感染への対策が必要である。

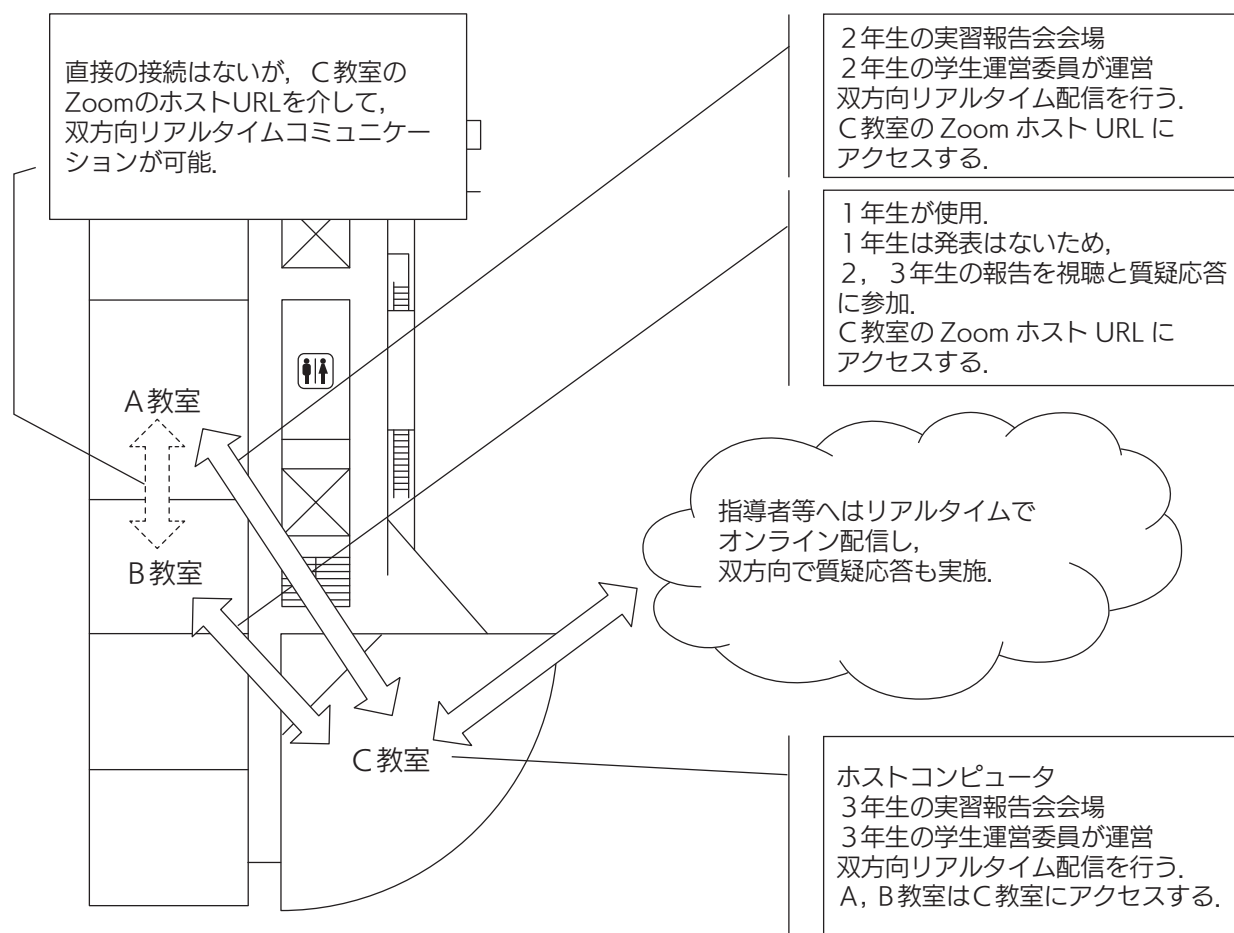


図 教室の配置

が、複数の学生が登壇し、マイクを順に回しながら実施する様子も見られていた。

今回のプレゼンテーションについては、飛沫・接触感染対策、緊急事態に備えられることを前提に、ハイフレックス型授業形態の中でも混乱なく実施できるよう、事前に録画して上映することとした。当日は学生運営委員が日程プログラムに沿って、動画をホストパソコンであるC教室より再生し、会場の参加者は席に着いたまま視聴した。

プレゼンテーション動画は、パワーポイントを使用したプレゼンテーションで、2年生7分間、3年生10分間の時間を原則とし、保存する拡張子はMP4に指定して事前の提出を求めた。

4) 質疑応答の対応と配慮

質疑応答の方法について、例年は、3グループ程度のプレゼンテーション終了ごとに、まとめて質疑応答を行うスケジュールとし、学生運営委員による司会進行により、応答グループ内で相談を行い、応答している。複数の質疑が続く際に複数の学生がマイクを順に回しながら発言することもあった。

今回の質疑応答においても、会場における活発なディスカッションを展開できるよう、感染対策に配慮

しつつ、オンライン参加者以外は原則対面で実施することとした。マイク共用による感染の対策として、マイクのウィンドシールドや持ち手をその都度消毒することが求められるが、タイトなスケジュールであることもあり、その中での消毒対応は、取りこぼしなどのリスクが考えられる。そこでマイクを通じた接触感染を防ぐため、以下の工夫をおこなった。

開催時間の関係もあり、2年生は、3グループのプレゼンテーション終了ごとにまとめて質疑応答を行った。2年生の会場であるB教室では、マイクのウィンドシールド部にマイクカバーを装着し、質問用、応答用それぞれをマイクスタンドで固定し、学生が原則手を触れずに質疑応答ができるようにした。(写真1, 2, 3) 応答者は各グループで事前に決定しておき、質疑応答開始と同時に応答スペースで待機、自グループに対する質問者からの質問に、原則代表者1人で応答することとした。B教室にいる質問者は、質問スペースにソーシャルディスタンスを保ちつつ移動し待機した。B教室以外からの質問は、Zoomを通して実施。C教室の3年生は、C教室に設けた質問スペースにソーシャルディスタンスを保ちつつ移動し待機した。A教室の1年生は挙手の上教員が消毒等を実施したマイクで対応。実習指導者やオンライン参加の学生は、

Zoomのチャットへ「質問がある」旨の書き込みを依頼した。質問は、実習指導者、3年、2年、1年、4年の順で、各1人ずつおこなった。質問者はグループを指定し質問をおこなった。マイクカバーは発言者ごとに、担当学生が不織布マスクとフェイスシールド、ゴム手袋を装着した上で交換して専用のゴミ袋に廃棄し、持ち手やマイクスタンド上部の消毒を実施した。

3年生は、1グループのプレゼンテーション終了ごとに質疑応答を行なった。3年生の会場であるC教室では、2年生と同様にマイクのウィンドシールド部にマイクカバーを装着したマイクを準備。質問側のみマイクスタンドにマイクを固定し、学生が原則手を触れずに質問を発言できるようにスペースを確保した。応答に関しては、臨機応変にグループ内で変更できるように、担当学生が、マイクスタンドに装着したハンドマイクを応答者の口元に近づける方法を取り、持ち手に触れることなく発言できるよう工夫した。この際、担当学生は、不織布マスク、フェイスシールド、ゴム手袋を装着、マイクにはマイクカバーを装着し、発言者ごとにマイクカバーの交換・専用のゴミ袋への廃棄、持ち手やマイクスタンド上部の消毒を実施した。2年生と同様に、C教室以外からの質問はZoomを通して実施。B教室の2年生は、B教室に設けた質問スペースに、ソーシャルディスタンスを保ちつつ移動し待機した。A教室の1年生は挙手の上教員が消毒等を実施したマイクで対応。実習指導者やオンライン参加の学生はZoomのチャットへ、「質問がある」旨の書き込みを依頼した。質問は、実習指導者、3年、2年、1年、4年の順で、各1人ずつおこなった。

4. ハイフレックス型報告会の運用についての課題と検討

登校禁止措置時にも代替方法での開催ができるよう、完全オンライン実施の方法についてあらかじめ備えとして計画した。内容については、動画の再生は、ホストコンピュータであるC教室より教員が操作を実施し、進行はオンライン上で、学生運営委員が実施す

ることとした。質疑応答はZoomのチャットへ、「質問がある」旨の書き込みを行い、実習指導者、3年、2年、1年、4年の順で、各1人ずつ行う計画とした。

ハイフレックス型実習報告会においては、進行に伴う運営における連携方法も重要である。教室に備え付けられているパソコンの他にも、運営に関わるパソコンを設置し、相互でフォローした。また、各教室に配置した各学年の学生運営委員間の綿密な事前打ち合わせと、リハーサルによる連携強化を行い、統一した進行マニュアルを作成し、運営・進行を行った。

ハイフレックス型での取り組みは、実習教育へのICTの導入機会としての試行となった点は、成果といえる。しかし、複数の場を結ぶ上では以下の課題があった。

一点目は、実習指導者らの外部アクセス上の課題である。実習指導者の職場環境は、インターネット環境の整備が十分ではない場合もあり、インターネット環境の課題や、Zoomの操作に関する技術的な課題も散見された。さらに、当日参加できなかった実習指導者に対し、オンデマンドによる動画の配信を実施したが、パソコンのスペックにより視聴できないアクシデントがあった。これらに関しては、パソコンだけではなく、スマートフォンやタブレット端末も活用できることをアナウンスするなどの告知に工夫が必要である。

また、外部からオンラインでの参加を依頼した実習指導者に個別にURLをメールで送信したため、直前での参加希望に対して、その都度の個別対応が必要になった。参加申込方法やURLの案内方法に工夫が必要である。

二点目としては、通信環境と操作技術に関する課題である。教室を超えた質疑応答にあたり、マイクの高さなどによる音声不調や、一時的な通信環境の不具合などにより、聞き取りづらい場面が複数回みられた。ミュートを解除しないままの進行も複数回あった。運営に影響せず教室間でコミュニケーションをとるための媒体の整備や、音声だけに依存しない、Google フォームなどを活用した幅広い質問の受付方法などの



写真1 質問用マイク



写真2・3 マイクカバーの未装着マイクと装着したマイク

検討が必要である。

三点目としては、固定カメラの画角外の様子がオンライン環境下ではわかりづらいという課題である。学生が質問への応答に向けて検討している様子がうまく伝わらず、無音の時間が続くこととなった。ウェアラブルカメラなどの移動式カメラを活用するなどし、会場の状況がオンライン参加者にも伝わりやすくするための検討が必要である。

III. 結論

本稿は、COVID-19禍において感染対策の視点から試行した「ソーシャルワーク実習報告会」の実践報告を通じ、本学実習報告会の実施形態に関する資料を得ることを目的とした。

COVID-19が要因となり、学生の学びの機会に制約が生じているものの、学習機会そのものが剥奪されることは、可能な限り避けるべきことである。ソーシャルワーク実習教育において、実習報告会は「体験内容の多面的理解と、意味付けを行うことで、ソーシャルワークを立体的に描く」（大友，2014b）ための実習後の貴重な機会であり、この機会を保障するためには、感染リスクに対する配慮が重要である。

本学実習報告会自体を完全に中止してしまうことはもちろんのこと、完全オンライン形式での実施でなく、制限下ではあるものの、学生間の対面による質疑応答を盛り込んだハイフレックス型における本学実習報告会の試行は、多学年合同で実施し、2・3年生の実習体験を踏まえた報告と学年を跨いだ意見交換を通じた、学び合いの機会、さらには感染対策上の考慮事項を明確化し、生の感染防止再教育の機会になったと考える。

文部科学省の調査では、2020年7月1日時点で、大学等の「約6割が対面・遠隔授業を併用して授業を実施」（文部科学省，2020b）しているなど、教育におけるICTの活用が身近となった。本学実習教育においては、臨床での実習を終えたのちに開催する200名近い参加者による本学実習報告会を実践しているが、こうした実習報告会のICT活用に関する先行研究はなく、本報告は、今後の実習教育の資料としての位置づけとしても意義があるといえる。

今後もCOVID-19の影響は継続することが懸念される。感染対策を講じた教育方法の模索は、簡単なものばかりではない。しかしながら、学生の学びに不利益が生じないよう、今後も教育実践における創意工夫が重要であり、教育上の課題を具体化・細分化し、学生・教員・関係各所と協議の上解決・解消していくことにより、実現できることもおおいにある。本稿の報告は、そのひとつの教育実践である。専門職養成を行う教育機関は、様々な制限がある現状の環境下において、柔軟に思考しアクションができる質の高い専門職を養成

し続けることが重要な責務の1つであり、より充実した実習教育を行っていくことが、今後の大きな課題である。

謝辞

今回初めての形態で企画・運営したハイフレックス型実習報告会。感染対策を実施しながら、知恵を絞り時間をかけた意見交換と工夫、綿密な準備を重ねた学生の力、学科教員の理解と協力および、学内の各関係部署の連携協働、実習指導者のご協力があったからこそ実現できたものです。この場を借りて深謝いたします。

注釈

注）実習報告会学生運営委員会：本学ソーシャルワーク実習報告会の運営は、学生を主体としている。2年生3年生の実習指導グループより、それぞれ1～2名ずつ選出し、ソーシャルワーク実習報告会の運営を担っている。2020年度は、2年生より7名、3年生より10名選出。運営委員長・副委員長・司会・パソコン操作・印刷・会場の係に分かれ、運営に伴う課題の検討や当日の運営を実施した。

文献

- 北海医療大学看護福祉学部臨床福祉学科社会福祉実習委員会編（2020）。2020年度社会福祉実習要綱。北海道医療大学看護福祉学部臨床福祉学科。
- 北海医療大学（2020）新型コロナウイルス感染症に対する基本対応方針（第6版）。(http://www.hoku-iryo-u.ac.jp/for/pdf/kihontaiouhoushin_6_20201007.pdf)
- 文部科学省（2020a）。令和2年度における大学等の授業の開始等について（通知）。(https://www.mext.go.jp/content/20200324-mxt_kouhou01-000004520_4.pdf) 2021年2月11日アクセス
- 文部科学省（2020b）。大学等における新型コロナウイルス感染症への対応状況について。(https://www.mext.go.jp/content/20200917-mxt_koutou01-000009971_14.pdf) 2021年1月1日アクセス
- 大友芳恵（2014a）。実習報告会。米本秀仁、久能由弥（編著）。第2版相談援助実習・実習指導，368-373，久美，日本。
- 大友芳恵（2014b）。実習の振り返り。米本秀仁、久能由弥（編著）。第2版相談援助実習・実習指導，286-291，久美，日本。
- 田口真奈（2020）。授業のハイブリッド化とは何かー概念整理とポストコロナにおける課題の検討ー。京都大学高等教育研究，第26号，65-74。

受付：2020年11月30日

受理：2021年3月9日